

紅蓮地獄② 氷の下

燃えるような真っ赤な蓮華が池に群生している。

大焦熱地獄から落ちてきた男は、目が覚めるような紅い蓮華に誘われた。ところが、池の畔に立って驚嘆する。池一面が白く凍っているからである。

氷は厚そう。

片足をそっとのせてみる。

両足を揃えてみる。

立っても割れない。

飛び跳ねた。

「大丈夫だ。よし！」

はるか池のかなたに、紅蓮華の群れが風にそよがれている。中年婦人の手招きのように見える。まるで男を誘っているようだ。かつて、女たちを出汁にして贅沢三昧をしてきた男は、針の山でさんざんに八つ裂きにされ、この紅蓮地獄に移された。

紅い華がしなやかに揺れている。

甘く、怪しく、ふくよかな空気が伝わってくる。

男は、おそろおそろ池の淵に立った。そして、ゆっくりと、紅く燃える蓮をめざして歩み始めた。足がツルっと滑る。なんども尻もちをつきながら、池の真ん中を目指した。

やっと紅蓮華までたどり着いた。

「きれいだ。見たこともない」

見上げるほど立派な紅い華が、炎のようにゆらいでいる。大きな葉が日光を遮っているために、茎の部分は薄暗く、まるで密林のようである。鬱蒼としげる茎の下を、あてもなく彷徨っているうちに、氷の割れ目に足を踏み入れてしまった。

ゴボ、ゴボ、

ゴボゴボゴボゴボゴボゴボ、コポッ、コッ、ポッ……

口から泡を出し、手足もがきながら、深く、深く、池の底へ沈んでいく……

寒い。

冷えきって、全身の震えが止まらない。

たちまち凍傷して皮膚が割れてきた。

割れ目から血が滲み出してくる。血が赤黒く盛りあがってくる。噴き出た血は、みるみるうちに凍っていく。血のかたまりにひびが走る。その傷口が、ポツカリと開いた。

全身は、まるで花びらが開いた噴火口のようだ。どれもが紅蓮華に似ている。いや、紅蓮華だ。

盛りあがった紅蓮華の皮膚が、また凍結して、裂けた。

「あの、あの、あの女が、あの女が手招きしたのか」

男は、キリキリと歯をきしらせた。

ここは、大焦熱地獄の直下にある紅蓮地獄である。

け、け、け、け、け……………